

(続紙 1)

京都大学	博士 ( 教育学 )	氏名	小山内秀和
論文題目	物語世界への没入体験 –測定ツールの開発と読解における役割–		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、読者が物語世界に没入する体験を明らかにする測定ツールを開発し、読解における役割を実証的に解明した認知心理学的研究である。8章、8個の研究から構成されている。</p> <p>第1章「序論」では、導入として、人がなぜ物語を作り、また読むのかという問いを提起し、物語の定義について論じた。さらに、物語への没入がどのような特徴を持ち、読みにおいてどのような役割を果たしているのかという、本論文における問題を提起した。</p> <p>第2章「物語読解における没入体験」では、物語の読解過程と物語世界への没入に関して、心理学の先行研究を論じた。特に、没入に関する概念整理を行うとともに、現在未解明の問題として、没入体験と (a) 個人特性との関連、(b) 文学的体験との関連、(c) 物語読解時における生起、(d) 物語理解の認知過程における役割を指摘した。そして、(e) 没入体験を定量的に測定する必要性を挙げ、これら5つの問題について検討することを本論文の研究目的とした。</p> <p>第3章「日本版文学反応質問紙の作成」の研究1「文学反応質問紙の予備的検討」では、物語世界への没入体験傾向を測定する尺度として、Miall &amp; Kuiken (1995) の文学反応質問紙を翻訳した68項目を作成し、229名の大学生に実施して、因子分析によって、共感・イメージ、現実の理解 (洞察)、読書への没頭、作者への関心、ストーリー志向の5因子を抽出した。さらに、研究2「日本版文学反応質問紙の信頼性と妥当性に関する調査的検討」では、日本語版(LRQ-J)37項目を、497名の大学生に対して実施し、尺度の信頼性と他の関連尺度との併存妥当性を示している。</p> <p>第4章「文学的体験と読書、余暇活動との関連」の研究3「女子大学生における文学的体験傾向と読書習慣の関連に関する調査的検討」では、236名の女子大学生に対して、読書への没入体験と現実理解・自己洞察の関連が強いこと、没頭傾向と小説・詩歌などを読む頻度の関連が強いことを示した。さらに、研究4「文学的体験傾向が読書活動に及ぼす効果に関するウェブ調査による検討」において、同様の調査を20–50代の男女800名に対して実施し、同様のモデルが支持されることを確認するとともに、男女差の検討の結果、女性は文学的体験傾向の得点が男性より高く、男性は、読書への没頭傾向から作者・文体への注目への影響が女性よりも高いということを明らかにしている。</p> <p>第5章「物語読解時の没入状態の生起に関する検討」では、研究5「日本語版移入尺度の作成および信頼性と妥当性の検討」において、実際の物語を読解させた時の没入状態を測定する新たな尺度として、移入尺度の日本語版15項目を、大学生・専門学校生185名に実施し、信頼性妥当性を検討した。研究6「物語への没入傾向が移入体験の生起に及ぼす効果に関する調査的検討」において、大学生89名に対して、LRQ-Jで文学体験傾向を測定し、読書への没頭と共感・イメージが実際の物語読解時の没頭 (移入) に影響を及ぼすことを見出している。</p>			

(続紙 2)

第6章「没入体験が物語読解に及ぼす効果」では、研究7「没入体験傾向が物語読解過程に及ぼす効果に関する実験的検討」において32名の大学生に、4種類の物語を読ませ、読解時間と体験や感情関連の尺度への評定を求めた。その結果、LRQ-Jの共感・イメージ得点が高いほど、読みの動機づけが高まることを見いだしたが読解時間への影響はなかった。そこで、研究8「没入教示が物語読解過程に及ぼす効果に関する実験的検討」では、38名の大学生に、「物語の情景をイメージして登場人物に共感しながら」読むように教示して、参加者の没入への構えを操作して、研究7と同様の手続きで実験をおこなった。その結果、共感・イメージ得点が高くなるほど読解時間が短くなることを明らかにした。

第7章「総合的考察」では、第6章までの実証的検討を踏まえ、物語への没入体験と読書習慣との関連、これらがどのような心理特性と関連するかという問題、さらに、物語読解における没入の位置付けと役割について論じた。没入体験が物語読解を促進する可能性を指摘し、「物語没入 - 読解モデル」を提案した。そして、物語への没入をキーワードに、人間が物語を読むという活動を、物語理解と個人内特性、読書活動の相互関係を統合的に捉える枠組みを提案した。

第8章「結論」では、本論文が示した成果の学問的、社会的意義、とくに、教育や臨床心理学分野への応用、そして今後の物語研究への展望を論じた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、物語世界への没入体験を調べる 2 つの測定ツールを開発し、読解における役割を実証的に解明する 8 つの研究を行なった。そして、これまで未解明であった没入体験を測定し読解過程への影響を明らかにしている。

本論文の特色は以下の 3 点である。

1. 物語への没入体験を、心理特性との関連や読書行動や読解過程への影響について、実証データと多くの領域での知見を踏まえて多角的に解明した点
2. 物語への没入の特性面を明らかにする文学体験尺度、状態面を明らかにする移入尺度を開発して、物語理解研究、物語を用いた実験研究、個人差研究、国語教育実践などに活用できる測定ツールを開発した点
3. 質問紙法による個人差を測定する方法と、心理学実験によってオンラインの読解過程を解明する方法を結びつけて、個人差を含めた統合的読解過程を解明した点で方法論上の新しさを持つ点

第 1 章では、文学理論と認知心理学などにおける物語研究を展望し、物語世界への没入体験は、さまざまな用語で説明されてきたことを指摘したうえで、没入体験を定義している。そして、読書における位置づけや役割を解明するためには、測定尺度を開発し、これを用いて物語を読む活動全体を捉えることの重要性を主張したところに本研究の着眼点の鋭さがある。

第 2 章では、物語への没入を、認知心理学の物語理解研究の動向に位置づけ、さらに、他領域の動向も踏まえて、没入をめぐる理論を整理し、物語の没入体験の 6 要素を指摘し、本研究の課題を明確化している。これは、新たな研究分野を開拓する重要な貢献である。

第 3 章では、日本版文学反応質問紙を作成するために、研究 1 と研究 2 において、海外の研究に依拠した尺度と関連尺度を日本人大学生に実施し、日本の文化を考慮した物語体験を測定する尺度を開発している。このことは、方法論の上でこの分野における貴重な成果である。

第 4 章の研究 4 では女子大学生、研究 5 では、市民を対象に調査をおこない、没入体験傾向と様々な読書習慣との関係を見だし、さらに、文学体験傾向の男女差を見いだしている。こうした文学体験傾向の大規模データは少なく、没入体験の重要性や性差を示した点で、物語研究のみならずジェンダー研究、そして教育実践や読書文化を考える上でも大きな意義をもつ。

第 5 章の研究 5 では、物語読解時の没頭を測定する移入尺度を開発し、研究 6 では、文学体験としての没入傾向が物語読解時の移入に影響を及ぼすという新たな結果を見出している。物語を読ませて、その物語に即した項目を含む形での移入尺度の開発は、物語への没入体験を解明する点で、方法論的にも学術的にも重要な成果である。

第 6 章では、研究 7 の物語読解実験とそれを改良した研究 8 における物語没入教示をおこなう実験によって、没入傾向の高さが読解を促進することを見だし、研究 6 までの調査研究と実験研究を結びつける結果を導いている。これは、オンライ

(続紙 4)

ンの読解過程に、没入傾向の個人差が影響することを示した学術的に意義ある発見であり、方法論的にも注目に値する。

第7章では、8つの研究のデータを踏まえて全体を考察し、物語への没入には状態と特性という2側面が存在すること、そのうち没入特性は、イメージ能力や空想傾向などさまざまな心理特性と関連すること、そして没入状態が読書の動機づけとしての役割を果たしているという重要な指摘をおこなっている。さらに、物語理解過程と没入との関係について個人差も含めた統合的議論を展開し、没入体験が物語読解を促進することを説明する「物語没入 - 読解モデル」を新たに提案していることは高く評価できる。

第8章では、本研究の学術的意義と国語教育実践などへの応用可能性、さらに、今後の課題を明確化している。これらのことは、この研究の発展可能性を示すものである。

以上のように本論文は、物語世界への没入体験を解明するために、多くの領域の研究を踏まえた問題意識に基づき、測定ツールを開発し、調査および実験データを積み重ねて議論を構築し、学術面と方法論面で多くの新たな成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 物語世界没入の6つの構成要素を解明するツールの開発、没入の特性および状態の個人差と認知能力個人差との関連の解明、
- (b) 没入傾向の個人差およびその文化差や性差に及ぼす、過去の読書や移入経験の影響と生物学的基盤の解明に加え、文化差の規定因としての共感とイメージ処理や自他の境界の検討
- (c) 物語世界への没入が状況モデル構築を促進するメカニズム、書き手の視点からの没入を成立させる物語の要件の解明

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成26年2月27日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                    年            月            日以降

